

サンフレンズ善福寺の見学会に参加して

連日34度という猛暑が続く7月中旬、特別養護老人ホーム「サンフレンズ善福寺」の見学会に参加した。

サンフレンズ善福寺は、定員30名の全室個室型の特養である。そして、ユニット単位で生活するというユニット型の特養でもある。いわゆる従来型の特養とどこが違うのか、それを知りたいと思った。



当ホームは、都立善福寺公園に隣接しており、閑静な住宅街の中にあつた。まず印象的だったのが、外観が周辺の住居に溶け込んだ色調になっており、外壁も生垣で出来ていることだった。施設らしくなく住居と間違えて通り過ぎるところであった。

このホームの特徴として、居室が広いことがあげられるだろう。居室面積は、19㎡(約11.5畳)で、その中に洗面台と車椅子対応の広いトイレがある。ベッドと私物のたんすや立派な仏壇を置いても、あとひとつベッドを置けるスペースがある。家族の訪問があつても居室内でゆっくり談笑できるし、家族が一緒に泊まることもできるのである。



仏壇のある居室

浴室はユニットごとに家庭にある浴室と同等の広さのものが一つず

つある。ひとりずつ入り職員が一对一で介助にあたる。ホーム全体の共用として機械浴槽と3~4人用の少し広めの浴槽もある。そしてなんと機械浴槽も含めて、すべての浴槽がヒノキでできているのである。浴室のドアを開けるとプーンとヒノキの良い香りがした。少しでも心地よく暮らせるようにと願うホームの思いを感じた。



機械浴槽もヒノキ

利用者は、ユニットごとに居間のソファで皆とテレビを見たり、職員とゆったり話をしたりして過ごしていた。利用者の表情は、落ち着いていて、くつろいでいるように感じた。従来型特養のような業務を優先する介護はなく、利用者の生活のペースを尊重した支援が行われているようであった。従来型の特養とユニット型特養とでは、働き方に違いがあるかとの問いに対して、職員は「ユニット型の方が利用者一人ひとりに目が行き届き、その人らしく生きるためのお手伝いがしやすい」ということであった。それを実践しているといえるだろう。

利用者の平均年齢84.5歳、平均介護度4.1。平均介護度が高く、まさしくここは特養なのに、従来型特養にない「住居」に住まう人々がそこにいた。

ホームのパンフレットには、『「個」の尊重で施設が住居に変わります』とあつた。その言葉が印象に残つた。

見学が終わり、隣接する善福寺公園の中を通つた。善福寺池を中心に緑が生い茂り、木陰のなかを涼しい風が行きかう。良いホームに出会つた満足感とともに帰路についた。

(ひと・まち社 評価者 山下順子)

● 2011年度10月自治体政策研究会

日時：2011年10月15日14:00～17:00 会場：東京ネット4階第1・2会議室

大震災を経て検証された都市防災のあり方、問われる自治の力

講演1：地域防災計画見直しの事例から 吉川忠寛氏(株式会社 防災都市計画研究所所長)

講演2：避難場所・避難所・避難拠点と運営 高橋洋氏

(NPO 法人福祉広域支援ネットワーク サンダーバード理事、元練馬区危機管理室職員)

講演3：東京都地域防災計画見直しの論点 伊藤久雄氏(東京自治研究センター)

● コメンテーター：坪郷實氏(早稲田大学社会科学部教授)

東日本大震災は、日を追うごとに被災前には見えなかった社会の脆弱な部分が露呈し、身近な自治体のまちづくりに基本的な見直しを問いかけています。少しずつ明らかになった被災地の経験や情報をもとに、改めて地域防災や危機管理のあり方を問う議論の場を設けます。

● 参加ご希望の方はお問い合わせください：自治体政策研究会(連絡先：03-3204-4342 ひと・まち社)